

やまなし文学賞青少年部門青春賞

雪崩 河野日奈 作

夢を見た。

目の前に広がる真っ白な景色。そこに、何か黒いものが点滅して見える。

よく目を凝らすとそれはカーソルで、私が言葉を紡ぎ出すのをじっと待つかのように、繰り返し浮かんでは消える。何時間も何日もその空間にいるような気がして、次第に息が苦しくなる。言葉を紡ぎたいのに、声が出せなくなる。真っ白な景色はいつの間にか暗闇に変わって、私を追い詰める。そして――

私は、落ちる。暗い暗い場所へ。

もう二度と、戻ってこられないような場所へ。

ため息をついた。多分、私は今日だけで半年分くらいの幸せを逃がしている。

「六花^{りっか}、元気ないね。明後日から夏休みなのに。何かあった？」

そう尋ねながら、日葵^{ひまり}が卵焼きを口に運んだ。

「今朝、嫌な夢見ちゃって」

「夢かあ。夢ってわりと自分の現状とかとリンクしてるらしいけど」

「夢占いとかもあるもんね。いやでもなんていうか、もっと直接的とかいうか」

「暗示とかじゃなく、ってこと？」

「まあ、うん」

「そっか。まあなんかあったら相談しなよ」

「ありがとう」

日葵とは、高校に入学してから一番初めに仲良くなった。読書好きというありきたりな趣味が合って、そこからよく話すようになって。今は、一緒に文芸部に所属している。昨年度、日葵は詩で私は小説でそれぞれ県の大会に入賞した。お互い最優秀賞ではなかったけれど、一緒に喜んで、おめでどうと言いつつ、きつと、私はそのときから日葵をどこかライバルのように感じるようになったのだと思う。日葵の書く詩が好き。日葵の世界観が好き。尊敬しているし、絶対に私が一番のファンだ。それでも、負けたくない

い。そんな気持ちが少ないからであつた。

だから、書けないということを目葵に相談するのは少し気が引けた。自分だけが立ち止まっているというのを自覚させられるようで。でもそれと同時に、そんなことを気にしているのが自分だけだということも心のどこかで分かっている。日葵にとって一番大切なのは、自分が納得するものを創りあげることだ。賞とか、そんなものは彼女にとって二の次。日葵を勝手にライバル視して、優劣を気にしているのは、私だけ。その事実がまた、劣等感を加速させた。

「あ、そういえばさ。私今年の大会は小説に出してみようかなって」

「小説？」

「うん。なんか六花見てたら楽しそうだなって思っちゃってさ」

「：そっか。うん、いいと思う。日葵、得意そう」

「やだなあ。六花には敵わないよ」

日葵は、そう言っつていつものように笑っていた。日葵が、小説を書く。ただそれだけのことなのに、速くなつていく鼓動を止めることができない。たった一瞬で、どうしようもないくらいに不安が募っていく。

落ち着きを取り戻したい一心で、窓の外に見える積乱雲が流れていくのをただ見つめる。風に揺れる葉桜のざわめきが、微かに聞こえた気がした。

夏休みが始まった。午前中の課外を終えて、日々家にこもつて課題と創作に追われていると、ひたすらに鳴き続けている蝉の声になんだか親しみを感じるようになる。相変わらず執筆は進まずあの日見た夢のようにカーソルは止まったままだ。それっぽい導入を書いてみては消し、もう一度名ばかりのプロットを見直す。キャラクターの名前、性格、思想。そこに何を託すかひたすらに考える。どんなに些細なアイデアでも、何か浮かべばそれに縋るような思いで手を動かしてみる。それでも結局、自分の感覚とぴったりに一致するものには辿り着かない。書くことを、楽しいと思えない。いつそのこと日葵のように違う部門に応募してみるのもいいのかもしれない。

でも、小説から逃げたくはなかった。

今日は、お昼から日葵と遊ぶ予定を立てている。正直、日葵の顔を見てしまったら落ち着いてきた劣等感が再燃しそうで、あまり気は進まなかった。表面的な気分だけでも

高めようと、好きなバンドのアルバムを大音量で流す。部屋を満たしていくエレキギターの音色は尖^{とが}っているようで、どこか優しかった。

「ごめん、六花。待っちゃった？」

少し早く着いて、適当にベンチに腰かけているとそう声を掛けられる。声のした方へ目をやると、そこには女の子らしいミニスカートをかわいく着こなした日葵がいた。こんなところでも、劣等感を抱いてしまいそうな自分に嫌気がさす。

「大丈夫。全然待ってないよ」

せめて愛想だけでも思っ作った笑顔は、明らかに引きつっている感じがした。

「よかった。じゃあ、まずは腹ごしらえますか」

「そうだね。お店どこにする？」

「そうだなあ…」

余裕のない私と比べて、日葵は楽しそうに笑っている。私の心境を洗いざらい彼女に打ち明けたら、その笑顔は曇るのだろうか。日葵の創造力を羨^{うらや}んでいること。文才を羨んでいること。日葵に対して劣等感を抱いていること。そして、書けないことをその劣等感のせいにしてしまいたいこと。日葵を、嫌いになりそうな瞬間があること。

その日は結局、わだかまりが消えないまま日葵との時間を終えた。一緒に食べたお洒落^{しゃれ}な名前のパスタも、ふわふわのパンケーキもどこか無機質な味だったような気がする。夕立が降りそうな空を眺めながら、いつもより重たい自転車のペダルを漕^こぐ。

私はこの気持ちを、どう処理すればいいのだろう。

日葵が、小説部門で賞に入ったらしい。本人からそう聞いたのは、夏休みが明けて一か月ほど経^たった頃だった。「まあ、そうだろうな」と思った。

私になんとか書き上げた小説と違って、日葵の小説はしっかり練られていた。キャラクターの設定も、彼らを通して伝えたいことも、そのためのモチーフも。文体もあえて文語に近いような形に洗練されていて、正直私に書ける代物ではなかった。私には敵わないと笑っていた日葵を、少し恨んだ。

「あれ、六花残ってくれてたんだ。おつかれさま」

今日は表彰式だった。五限目からそれに参加していた日葵は、放課後になって少し疲れた顔をして教室に戻ってきた。それすら、なんだか羨ましいと感じてしまう。

「日葵こそおつかれ。どうだった？」

「最優秀賞の子と話す時間あって、ちょっと仲良くなれたよ。あと、審査員の先生の熱量がすごくて色々アドバイスしてくれた」

「…そっか…」

その一言に続く言葉を必死に探したけれど、語彙を失ったかのように何も出てこなかった。私は去年、最優秀賞の子とも審査員の先生とも話をする機会なんてなかった。直接アドバイスなんてもらえなかった。日葵だけ、どうして。小説を書くのは今回が初めてなのに、どうして。話を聞けば聞くほど、そんな思いばかりが積もっていく。

「日葵はやっばすごいね。今回初めてだったのに、ちゃっかり賞取ってるし」

単純におめでとうと伝えたい気持ちは確かにあるはずなのに、嫌味な言葉ばかりが口について出る。自分が、自分の醜い気持ちを隠し通せないことに苛立ちを覚えた。

「そんなこともないよ。納得できるもの、書いてないし。まあそんなの、書ける日が来るのかわかんないけど」

そう言って自嘲的に笑った日葵の顔を見て、これまで崩れないように堪えてきてた嫉妬も、羨望も、劣等感も、全部ぶつけてしまいたくなった。でもそれをしたところできっと心が満たされることはない。

「…ごめん、日葵。私、今日は一人で帰るね」

「いやいやこちらこそごめんね、わざわざ待たせちゃって。時間平気？」

「…大丈夫。勝手に待ってただけだし。おめでとうって、言いたかったし」

「そっか、ありがとね。じゃあ、また明日」

「うん、また」

日葵から顔を背けた瞬間、思わず涙がこぼれた。泣くほど悔しがっているなんて自覚していなかったけれど、一度自覚してしまったら止められない。

悔しい。羨ましい。もう、書きたくない。そんな気持ちばかりが、心の中に充満していく。自分の力不足なのに。決して日葵は悪くないと分かっているのに。でも、だからこそこの気持ちをぶつけるあてがなくて、ただただ苦しい。

遅咲きの向日葵が、まだぼやけたままの視界の端で凜と咲いていた。

次の日から、なんとなく日葵を避けるようになった。毎日一緒に行っていた移動教室も、登下校も一人。案外それでも寂しくないのだということに気が付いて、そのことに少し寂しくなった。それを埋め合わせるように、そして少しでも書くことの楽しさを思い出せるように、私は本を読んだ。授業の合間の休憩も、昼休みも、放課後も。そうす

ることで、日葵に話しかけなくて済む。話しかけられない理由ができる。日葵がそんな私のことをどう思っているのかは、あまり考えたくなかった。

『然し君、恋は罪悪ですよ。解っていますか——』

ここ一週間恒例になった放課後の図書室。目に留まったポップにはかの有名な『ころ』の一節が達筆で綴られていた。なんとなく手に取って、椅子に腰かける。ぱらぱらとペー지를捲ると微かな風に湿気でぺちゃんこになった前髪が少し揺れた。

ふと、ある光景を思い出す。中学校の教室。まだ初々しさの残る一年生の二学期。私は、窓際の一番後ろといういわゆる主人公席で、空気と化して昼休みを過ごしていた。聞こえてくるのは教室の真ん中あたりにたむろっている女の子たちの恋バナ。初めは、誰が好きだの誰と誰が付き合ったの可愛らしい話で盛り上がっていた。けれど、それはだんだん毒を帯びていく。あの二人は釣り合っていない。好きな人を取られた。あの子はただのぶりっ子だ。

そういう妬みや嫉みを抱いてしまうのは、人間である以上きつと仕方のないことだ。それを表に出してしまうことが、誰かにぶつけてしまうことが罪悪なのだと思う。彼女たちはあの瞬間、罪悪という沼に足を踏み入れてしまった。

そして私も、そこに落ちた。日葵のことを嫌いになったわけじゃない。ただ、これまでのように純粋な友達でいられるかどうか、私には分からなかった。わけも分からず溢れそうになる涙を堪えようと唇を固く結ぶ。できたばかりの口内炎が刺激されてじんわりと痛んだ。

その痛みすら、今は甘んじて受けなければいけないような、そんな気がした。(了)